

経済学科

藤井 孝宗 先生



——先生の講義は国際貿易理論を扱っていますが、今日の世界におけるWTO（注：世界貿易機関。貿易の自由化と秩序維持を目的とする。1995年発足）のような機関は、貿易において不可欠なものなのでしょうか？

藤井 WTOというのは貿易のルールを作る機関です。WTOの前身となったのがGATT（注：関税および貿易に関する一般協定。1947年調印）という協定ですが、あれはブロック経済のような、自由でない貿易を行ったことが第二次世界大戦の一因であるという反省に立って、差別的な貿易待遇をしないことが平和につながるという考えで作られたものでした。グローバル化が進む現代の貿易には、WTOのような機関は不可欠だと言えるのではないのでしょうか。

——WTOは平和貢献を一つの目的としているわけですね。しかし、WTOの設立をもってしても経済格差は完璧にはなくなってはいませんし、WTOの会議では反グローバル化派の過激な行動が目立ちます。どうしてあんなにもすさまじい暴動が起ってしまうのでしょうか？

藤井 実際に問題があるから、あのような抗議が行われるわけですけど、彼らが掲げる理由にはそれが本当にグローバル化のせいなのか、疑問に残るものも多いです。僕はグローバル化推進派ですが、同じく推進派のジャグディッシュ・バグワティ（Jagdish Bhagwati）という経済学者によれば、反グローバル化派の主張は大まかに行って、グローバル化は労働者を搾取している、環境破壊を促している、という二つに分けられます。これらは確かに問題です。ですが、これはWTOが主体的に解決すべき問題でしょうか。子供や女性の労働問題なども重大な問題ですし、もちろん貿易から派生して起きている問題も一部ありますが、これは各国が制度の整備などを通じて解決すべき問題です。

意見が違 立場同士の対話が 必要

—WTOに本来の役割以上のことが強いられているということでしょうか。

藤井 国際機関での交渉になると、様々な立場が入り乱れるために全体像が見えなくなって、持論を通すことに躍起になってしまうということもあります。大局的に、多角的に物事を見る余裕がなくなってしまって、「どうだ、俺はうちの主張を通したぞ」という手柄目当ての交渉になってしまう。誰もがそのことの問題点は分かっているんですが、バランス感覚をもった知識を活用できる人がいないんです。

それに、一口に経済問題といっても、分野が異なると、同じ国でもグローバル化への考えが異なるというねじれ現象が起きるということもあります。

—ねじれ現象とは具体的にどのようなものでしょうか？

藤井 農業とサービス産業を例にしてみましょうか。農業はアメリカやブラジル、オーストラリアをはじめ発展途上国のいくつかが自由化を目指しています。それに対し、ヨーロッパ諸国や日本は、自由化に反対している。ところがこの構図はサービス産業の場では大きく形を変えます。アメリカ、それにヨーロッパはサービス産業での自由化を望んでいます。日本は自由化を積極的には望まず、自国産業がまだ弱い発展途上国は国内保護を主張しているんです。

—では、今後の国際経済に必要なものとはなんなのでしょうか？

藤井 意見が違立場同士の対話が必要です。グローバリゼーション推進派にしても、世界の貧困をなくすためにはよいルールで貿易する必要があると考えているわけです。僕自身も途上国の貧困の問題に強い関心があります。ただ今はなかなかフィールドワークに行けずにいるのですが……。

先に名前を挙げたバグワティですが、以前、反グローバリゼーション派のあまりに過激な運動を見てショックを受けたらしいんです。なんでこんなにも激しい抗議



偏った立場の授業を
受けながら、
バランスのとれた
知識を養う

が起こるのか、と。バグワティはこの意見の食い違いを、双方の対話不足が原因だと言っています。

——先進国は発展途上国に対してフェアトレード〔注：公正な賃金や労働条件を保証した価格で商品を購入することで、途上国の自立や環境保全を支援する国際協力の新しい形態〕を採用すべきだという意見もありますよね。

藤井 実は、フェアトレードもいいことばかりとは限らないんですね。フェアトレードが採用されてしまうと、一部の農家だけに不当に高い賃金が支払われてしまう可能性がある。すると、その既得権益を巡って新たな争いが起こることがあるのです。結局、フェアトレードがうまく回るか回らないかは、主催業者側の良心に頼ることになってしまう。個人の良心に頼らなければならないシステムというのはいいものではありません。

それに賃金にしても、その国の基準で見れば決して安すぎるものではないという場合もあります。プランテーション農業のおかげで仕事があり、セイフティーネットも整備されている。一概にプランテーションが悪と決め付けることはできないでしょう。

——ここで別の角度から質問させていただきたいと思います。先生はどうして経済学を勉強しようと思われたのでしょうか？

藤井 実ははじめは歴史を勉強したいと思っていたんです。でも、お目当ての大学に落ちてしまったのであきらめました。経済学部には受かっていたんで、ならばきちんと経済学をやるうかと考えたんですね。



——経済学のおもしろさというのはいったい何でしょうか？

藤井 勉強してみれば分かりますが、経済学というのは非常に特殊な学問です。ミクロ経済学・マクロ経済学にしても、机上ではきれいな理論ですが、現実にそれが当てはまるわけではない。現実の問題は非常に複雑だからです。だから勉強しながらずっと、「いったいこれは何なんだろう……」と思っていたんですね。

でも——これはゼミに入ってから気づいたことごとなんですが——、現実の複雑な問題について、様々な要素を取捨選択し、抽象化して扱ってみると、理論がきちんとした答えを出してくれることが分かったんです。確かに現実を抽象的なものにはしてしまうのですが、むしろそれだからこそ、現実のコアの部分にあるメカニズムが見えてくる。これが分かった時に、経済学がぐんとおもしろいものに思えてきたんです。

——先ほど、国際経済の場において、バランス感覚を持った知識が必要とおっしゃいました。そのような知識を大学生活ではどのようにして養うことができるのでしょうか？

藤井 やはり、様々な考えを持った人の話を聞くことが大事ですね。実際に受講してみるとわかりますが、大学の授業では教員はわざと自分の立場に偏った意見で話しています。僕もそうです。もちろん、他の立場があることは理解していますが、持論を正しいものとして提示することで、「このような見方もある」とを学生に教えようとしているんですね。そのことを理解しながら、授業を受けていくことが必要でしょう。

——ありがとうございました。

藤井孝宗

高崎経済大学経済学部経済学科准教授。
横浜市出身。慶應義塾大学経済学部・大学院経済学研究科卒業後、
愛知大学経営学部を経て、2009年本学に就任。